

博 多 39

— 第75次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第331集

1993

福岡市教育委員会

博多 39

—第75次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第331集



1993

福岡市教育委員会

序

JR博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には、古代以来大陸との貿易拠点として栄えたことを示す遺跡が包蔵されています。

近年、地下鉄の開通、道路の拡幅など都市基盤整備が進み、大博通り、昭和通り、国体道路、明治通りに面した所は高層ビル化が進んでいます。これらの再開発事業に伴い、約100ヶ所の発掘調査を実施しています。

本書は、博多市街地のなかでは比較的高層ビル化が進んでいない昭和通り北側の第75次調査の発掘調査報告書です。本調査地は、博多の豪商神谷宗湛の住居推定地域に含まれています。調査においては、中世末から近世初期の櫛列・井戸などの遺構を検出しました。

発掘調査から資料整理まで、費用負担をはじめ、多くのご協力を賜わった吉田昌弘氏をはじめ関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

最後に、本書が「博多」復元と文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は、博多区奈良原町9-1・2の吉川昌弘氏による商業ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1991年11月から1ヶ月間発掘調査を実施した博多遺跡群第75次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治・岡崇・柳澤竜広・後藤和武・星子輝美・宮坂環があつた。
3. 本書使用の遺物実測図は、加藤周子があつた。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治、遺物を平川敬治があつた。
5. 本書使用の図面の製図は、山口謙治、山口朱美が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書には網場町5-11の試掘調査報告を付録として収録した。
8. 本書の執筆・編集は、山口謙治があたり、付録の執筆を加藤良彦が行なった。
9. 本書収録の出土遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開して活用していく。

本文目次

I 序説

1.はじめに.....	1
2.調査体制.....	1
3.遺跡の位置と立地.....	3

II 調査の記録

1.調査の概要.....	5
2.検出遺構と出土遺物.....	6
3.包含層と出土遺物.....	18

IIIまとめ.....18

付編 佐賀銀行工事立会出土遺物

1.工事立合に到る経緯.....	19
2.位置と概要.....	20
3.出土遺物.....	21

挿 図 目 次

Fig. 1	博多第75次調査地点地形実測図	2
Fig. 2	博多遺跡調査地点位置図	折り込み
Fig. 3	第75次調査地点近景	3
Fig. 4	遺構分布図	4
Fig. 5	遺構分布状況	5
Fig. 6	第1号井戸出土土器	6
Fig. 7	第1号井戸出土遺物	7
Fig. 8	第2号土壙出土土器	8
Fig. 9	第2号土壙出土遺物	8
Fig.10	第3号土壙出土土器	8
Fig.11	第3・9・14・52号上塙出土遺物	9
Fig.12	第50号土壙（SK-50）実測図	10
Fig.13	第50号土壙出土遺物	10
Fig.14	第52号上塙出土土器	10
Fig.15	第51号土壙（SK-51）実測図および完掘状況	11
Fig.16	第51号土壙出土遺物	12
Fig.17	第77号井戸出土土器	12
Fig.18	第77号井戸（SE-77）実測図および完掘状況・出土遺物	13
Fig.19	第77号井戸出土遺物	14
Fig.20	第78号柵列および第60号溝出土遺物	15
Fig.21	遺構検出時出土遺物	16
Fig.22	下層包含層出土遺物	17
Fig.23	出土銅錢	18
Fig.24	調査区位図	19
Fig.25	遺構概念図	20
Fig.26	土層柱状図	20
Fig.27	立会風景	21
Fig.28	土壙内白磁出土状況	21
Fig.29	土壙出土遺物(1)	22
Fig.30	土壙出土遺物(2)	23
Fig.31	土壙出土遺物(3)	24

I 序説

1. はじめに

博多区奈良屋町9-1・2の大博通りと昭和通りが交差する藤本交差点のそばに、吉田昌弘氏による商業ビル建設が計画された。この地は、博多遺跡群の北部に位置している。この地周辺は、博多市街地のなかでは比較的高層ビル化が進んでいない地域で、旧博多の面影を残している地域といえよう。商業ビル建設の計画者である吉田昌弘氏の依頼により、埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）は、1991年4月10日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、現地表下1.8m前後で黄灰色砂層となり、土壌・柱穴などの遺構が検出されるとともに、中世末の陶磁器・土師皿などが出土し、ビル建設設計図地全域に遺構が遺存すると考えられた。以上の試掘調査結果を受け埋文課は、この地および周辺地域は、中世末の博多の豪商である神屋宗堪の住居推定地であること、「息の浜」砂丘の近年の調査で、昭和通りよりも北側まで遺構が分布していることなどから、中世末を中心とした遺構が遺存していることが確実であり、神屋宗堪住居地に関する遺構・遺物の存在も予想されることから、全面的な発掘調査が必要であると決定した。

以上の決定を受け、吉田昌弘氏と埋文課は協議を重ね、調査費・調査期間・出土遺物の取り扱いなど契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、ビル建設基礎杭の打ち込み後、表土層のすき取り、土止めが完了し、調査用体憩所が確保された後、中世末の様相把握を目的として、1991年11月5日から約1ヶ月実施した。

遺跡調査番号	9136	遺跡略号	HKT-75		
調査地地籍	博多区奈良屋町9-1-2		分布地図番号	049-A-1	
開発面積	165m ²	調査対象面積	165m ²	調査実施面積	97m ²
調査期間	1991年11月5日～12月7日				

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことができなかったが、吉田昌弘氏をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査および整理報告作業は順調に進行したことを明示し、ご協力に謝意を表します。なお、発掘調査にあたっては晩秋の朝冷えの時期になったのにもかかわらず、10km以上の道程を通勤し、調査を行なってくださいました作業員各位に心からお礼申し上げます。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係

教育長 井口雄哉 文化財部長 花田児一 埋蔵文化財課長 折尾学
第二係長 塩尻勝利

調査担当 山口龍治

試掘調査担当 横山邦輔（主任文化財主事） 清本正志 加藤良彦

事務担当 中山昭則 吉田麻由美

調査・整理補助員 平川牧治 加藤周子 大丸陽子 山口朱美

調査・整理協力者 関崇・後藤和武・柳澤竜広（以上、福岡大学歴史研究部） 星子輝美

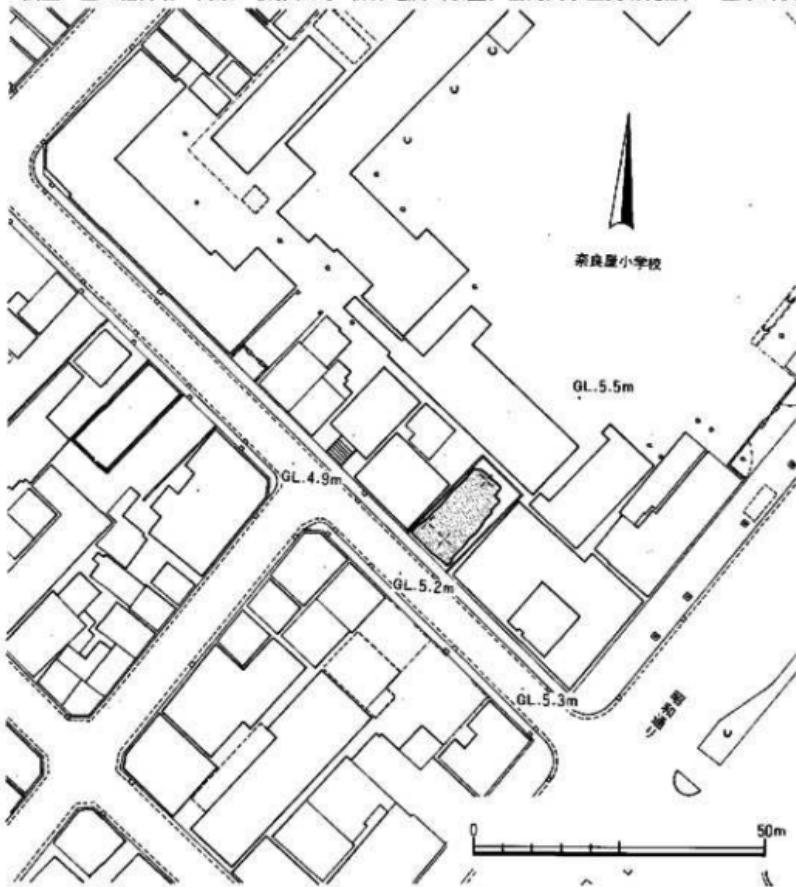


Fig. 1 博多75第1次調査地点地形実測図

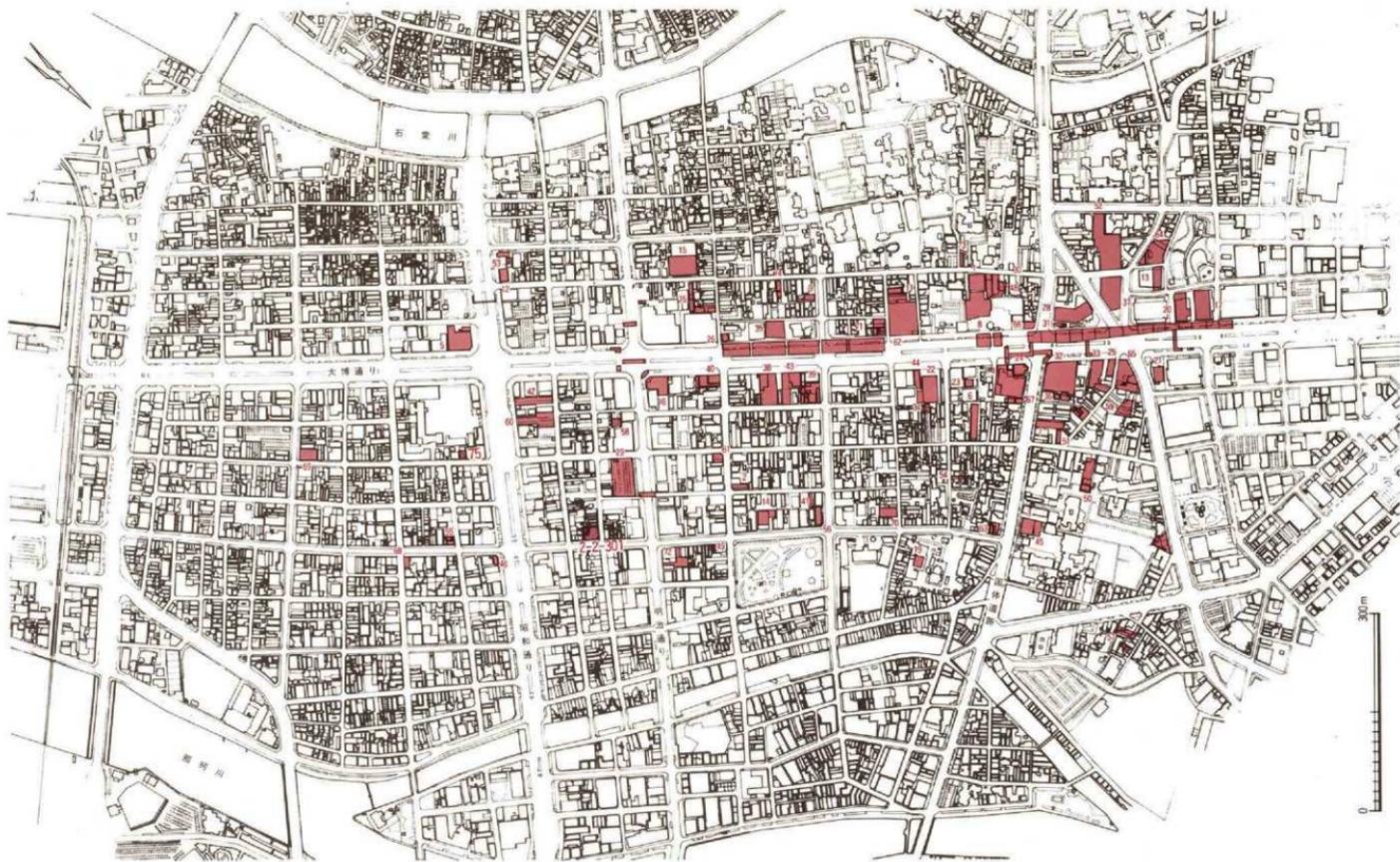


Fig. 2 博多道路調査地点位置図

宮坂環 有吉千栄子 赤星攝 池田礼子 大久保沙波 吉良山益美
佐々木美子 進藤順子 武田祐子 西野敦子 松下節子 太田明子 神
谷玲子 品川伊都子 矢川みどり

3. 遺跡の位置と立地 (Fig. 1・2)

福岡平野の博多湾岸には砂丘が形成されており、砂丘は東から多々良川・御笠川・那珂川・桶井川・室見川などが北流し、博多湾に注ぐ河川によって切られている。この砂丘上には多くの遺跡が所存している。博多遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた砂丘上に位置し、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、大きく海側の「息の浜」と内陸側の「博多浜」砂丘とその間に所在している。現在は標高4.2mから5m前後の平坦な地形の市街地となっている。

本調査地は昭和通りの北側で、大博通りと昭和通りが交差する藏本交差点の西北コーナーに位置する奈良屋小学校の西側に接している。現在の地籍は、博多区奈良屋町9-1・2である。博多遺跡群でみていくと、同遺跡群の北部にあたり、「息の浜」砂丘の中央部のはば頂部に位置し、現在の標高は5.3m前後である。国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から15.7cm、東から16.8cmの位置にあたる。

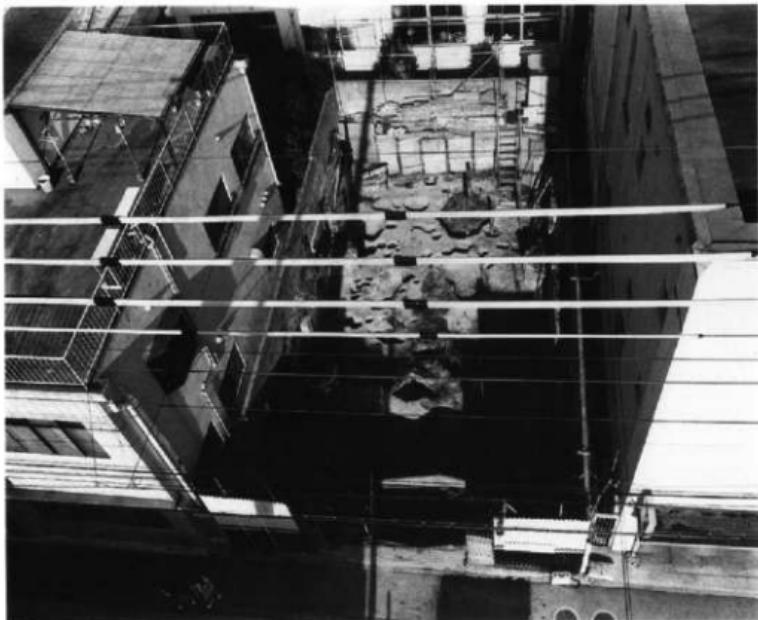


Fig. 3 第75次調査地点近景

本調査地周辺では、第5・29・42・46・55・58・60・68・69次の調査が実施されている。本調査地の東100m前後が第42・60次調査地、北東170mが第5次調査地、西170m前後に第46・55・68次調査地、北西220mが第69次調査地にあたる。

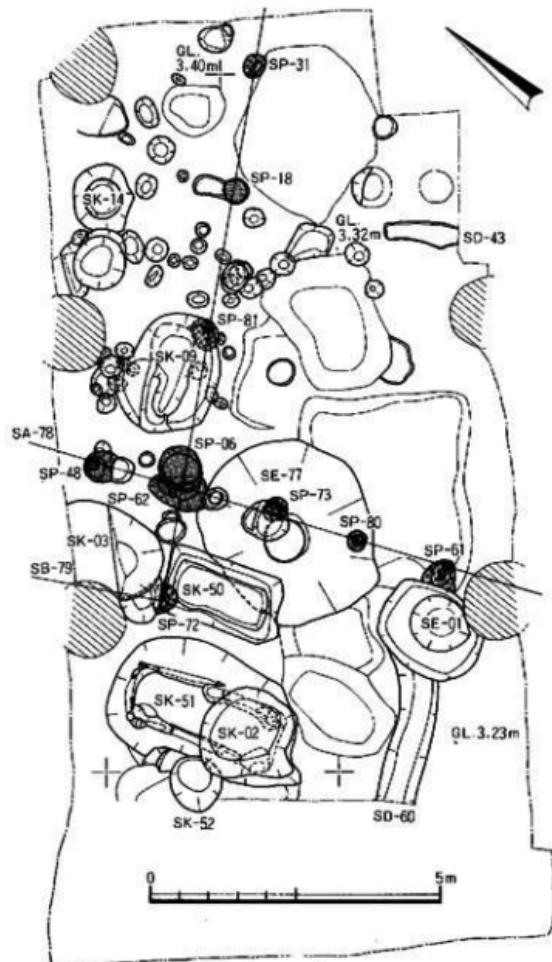


Fig. 4 遺構分布図

II 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地は、奈良屋小学校・道路と民有地に囲まれ、東北東から西南西方向に長い長方形を呈している。調査は、商業ビル建設予定地全域が調査対象地となっており、民有地に囲まれ、調査面積が狭くなるため、地権者との協議から基礎杭打ち込みを先行することとなった。また、作業用のユニットトイレを東南部コーナーに設置し、表上層のすき取り(約1.8m)、土止め工事を地権者に実施していただいた。

調査区は地権者によるすき取りで決定したが、廃土置き場がないため、道路に面した西南側に2.5m前後の引きを取り、調査を実施した。

調査はすき取り後、近世から現代の擾乱を除去することから始め、黄灰色砂層の上面(標高3.4m前後)で土壤・柱穴などの遺構が検出できた。以下、3.4m前後の面で遺構の平面形がわからないものについては、5~10cmずつ下げていき、平面形が明瞭になったところを面とし、標高3.2mの面まで遺構を検出した。黄灰色砂層の下の暗灰色砂層、黄灰色砂層、暗灰色砂層と標高50cmまで2m×8mの調査溝を設定して掘削したが、遺物は包含するものの、遺構は検出できなかった。

本調査地検出の遺構は、
柵列をSA、掘立柱建物を
SB、溝をSD、井戸をSE、
土壤をSK、柱穴をSPと
遺構記号を使用し、検出
順に遺構記号の後に2桁
の通し番号を付した(例
SE-01・SK-02……
SP-04……SP-43……
SA-78・SB-79)。な
お、本文中では遺構名と
遺構記号を併用している。

本調査地点の出土遺物
について、本遺跡調査
番号である9136の後に、
金属器は00001~00010、



Fig. 5 遺構分布状況

土器は00011からの通し番号を遺物登録番号としている。なお、本書のなかでは遺構および包含層ごとに通し番号を付した。

2. 検出遺構と出土遺物

検出遺構としては、掘立柱建物1棟(SB-79)、井戸2基(SE-01・77)、土壙7基(SK-02-03・09・14・50~52)、溝2条(SD-43・60)、柵列1条(SA-78)、柱穴多数がある。SA-78は後述するが、掘立柱建物の可能性が高い。以下、検出順に遺構と出土遺物をみていくことにする。

SE-01 (Fig. 6・7)

本井戸は調査区の中央部からやや南西寄りに位置し、SD-60、SA-78を切っている。長軸1.8m、短軸1.5mの平面形隅丸方形を呈し、60cm前後遺存する鉢形の掘り方をもっている。井筒は掘り方のやや東寄りに位置し、径1m前後を測る。井筒は本来60cm前後と考えられるが、素掘りで、板枠などの施設がないため壁が崩落し大きくなつたと考えられる。井筒底面の標高は2.11mである。

出土遺物：本井戸からは、Fig. 7でわかるように比較的まとまった遺物が出土したが、いずれも細片であり、図化できるのは土師器の皿などである。1~6はいずれも糸切り底の土師器で、1・2は皿、3・4が杯、5・6が小皿である。1・2の口径は13.8cm、12.8cm、器高は1.8cm、1.9cm、底径は9.5cm、9.3cm。3・4の口径は12.8cm、12.4cm、器高は2.55cm、2.75cm。5・6の口径は8.2

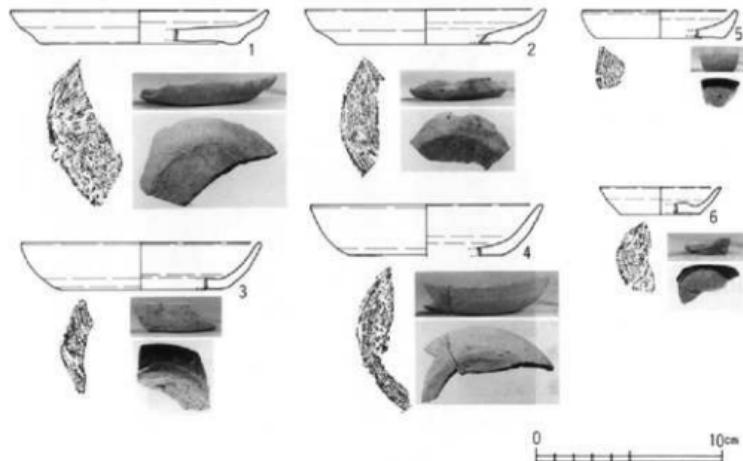


Fig. 6 第1号井戸出土土器

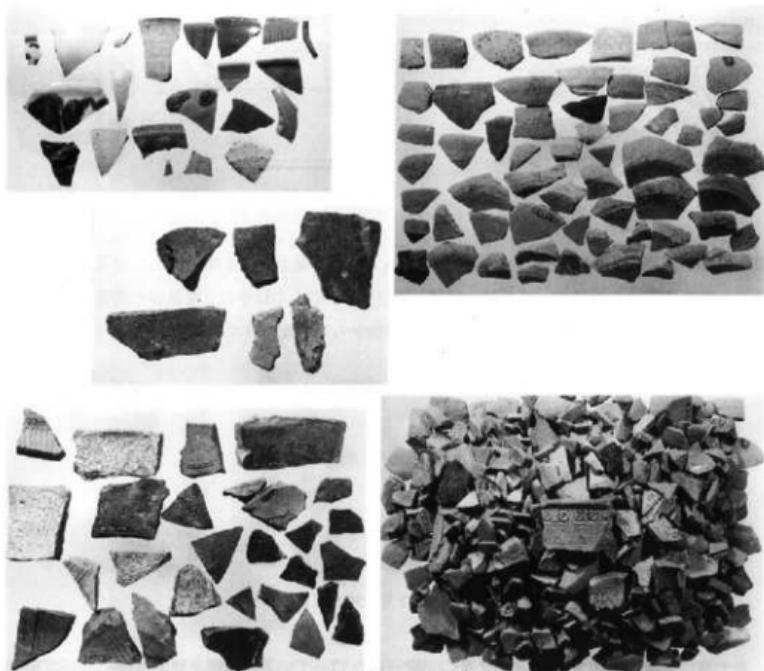


Fig. 7 第1号井戸出土遺物

cm、6.4cm、器高は1.5cm。底径は6.8cm、4.2cm。本井戸でもっとも多く出土したのが土師器の皿類で、口径が13cm前後、器高1.8cm前後、底径9.5cm前後のものと、口径が7.8cm前後で器高1.5cm前後、底径5cm前後のものがあり、前者が多い。壺類は皿類に比較すると少なく、口径12.5cm前後、器高2.6cm前後である。以上のはか、竜泉窯青磁碗、白磁碗、擂鉢などの陶器、瓦類、釘などの鐵器、鐵滓などが出土している。

以上の出土遺物から、本土塙は16世紀末から17世紀前半のものか。

SK-02 (Fig.8・9)

本土塙は調査区の西側に位置し、SK-51・52を切っている。径1.6m前後の平面形不正円形を呈し、60cm前後遺存している。床面は皿状をなし、壁は緩く開きながら立ち上がっている。

出土遺物：本土塙からは、少量の遺物が出土した。1・2とも土師器である。1は糸切り底の小皿で、口径7.2cm、器高0.9cm、底径5.7cmを測り、約1/4の遺存である。2は壺で口径12.1cm、器

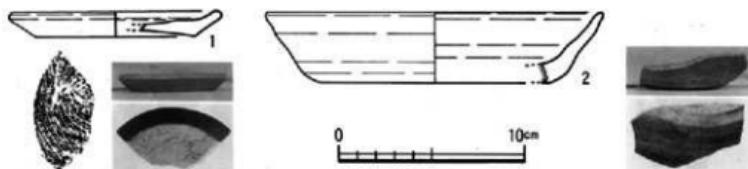


Fig. 8 第2号土壤出土土器

高2.55cm、底径8.3cmを測り、約36遺存している。糸切り底か。本土壙中の出土遺物も土師器が多く、底部遺存のものはすべて糸切り底で、坏が多い。以上のはかに、竈泉窯の青磁碗と白磁？の底部、鐵滓などが出土している。これらの遺物から17世紀前半の土壤といえよう。

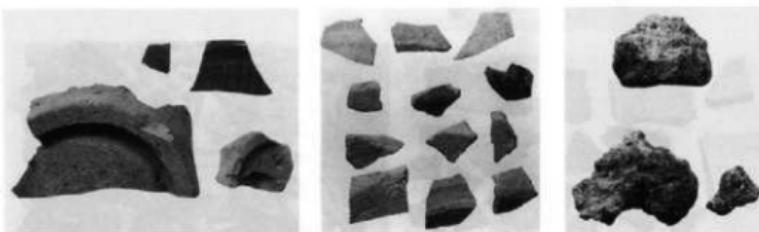


Fig. 9 第2号土壤出土遺物

SK-03 (Fig.10・11)

本土壙は調査区の中央部北側に位置し、SP-49を切っている。西側を建物基礎によって破壊され、北側は調査区外へ延びているため、調査できたのは15程度である。平面形は径1.8m前後の円形を呈すると考えられ、90cm前後遺存している。断面形は鉢形を呈しており、土壤としたが、井戸の掘り方か。

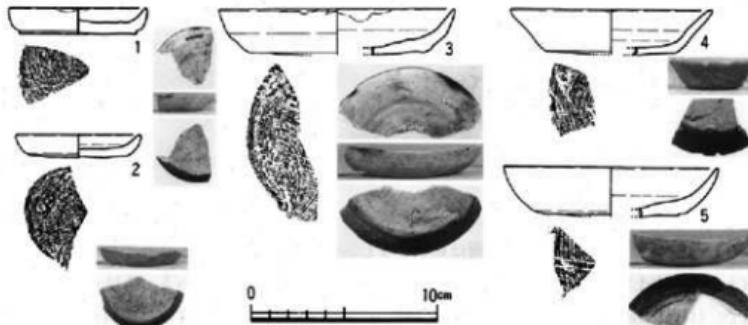


Fig.10 第3号土壤出土土器

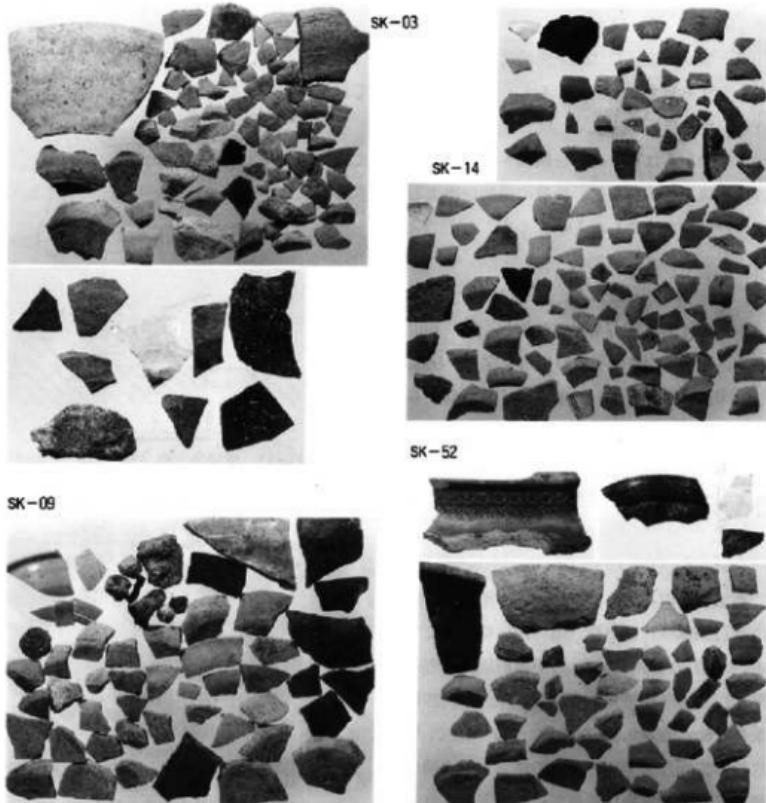


Fig.11 第3・9・14・52号土壤出土遺物

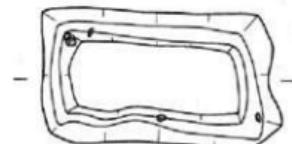
出土遺物：本土塙からは少量の遺物が出土した。1～5は糸切り底の土師器で、1・2が小皿、3～5は壺である。1・2の口径は7.2cm、6.6cm、器高1.4cm、1.25cm、底径6.2cm、5.3cm。3・5の外底には糸切り後板状圧痕がみられる。3～5の口径は12.6cm、10.8cm、11.4cm、器高は3・4が同じで2.45cm、5が2.7cm、底径は9.4cm、7.1cm、7.3cm。本土塙出土遺物も土師器が多く、底部が遺存しているものはすべて糸切り底である。以上のほか、擂鉢・甕などの陶器、鐵滓が出士している。

以上の出土遺物から、本土塙は17世紀前半のものといえよう。

SK-09 (Fig.11)

本土壙は調査区のほぼ中央部に位置し、SB-79を切っている。長軸2.1m、短軸1.5mの不正隅丸方形を呈する平面形をもち、2段掘りとなっており墓状をなしている。40cm前後遺存している。性格は不明。

本土壙からは青磁碗・白碗5点と糸切り底の土師器壺・皿と土鍋片など、少量の遺物が出土した。本土壙も17世紀前半のものといえよう。



SK-14 (Fig.11)

本土壙は調査区の北部に位置し、SP-39に切られている。径1m前後の平面形円形を呈し、50cm前後遺存し、床面は皿状をなし、壁は緩く開きながら立ち上がっている。

本土壙からは、糸切り底の土師器壺・皿が比較的まとまって出土した。17世紀前半のものか。

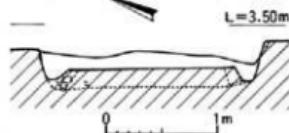


Fig.12 第50号土壙 (SK-50) 実測図

SK-50 (Fig.12・13)

本土壙は調査区の中央部からやや西寄りに位置し、SE-77を切り、SB-79に切られている。長軸2.1m、短軸1.2mの平面形隅丸方形を呈し、25cm前後遺存している。床面の内法は長軸1.5m、短軸0.6mを測り、ほぼ平坦で、壁に沿って幅10cmで10~15cmの溝をもつ溝が巡っており、板枠を張っていたと考えられる。地下倉か。

本土壙からは白磁碗、陶器甕、鉄滓と糸切り底の土師器壺・皿などが出土した。出土遺物から、本土壙は16世紀末から17世紀前半のものといえよう。



Fig.13 第50号土壙出土遺物

SK-51 (Fig.15・16)

本土壙は調査区の西側に位置し、SK-02・52に切られている。長軸3.6m、短軸2.2mの平面形隅丸方形を呈し、90cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、内法は長軸2.5m前後、短軸0.7m前後を測り、壁に沿って幅10~15cmの溝が巡っている。SK-50と同形態をなし、板枠を壁に沿って巡らしていた



Fig.14 第52号土壙出土土器

と考えられる。

地下倉か。

本土壙から
は、青磁碗・
白磁碗・青花
描き白磁・天
目などの小片
のほかに、土
師器の土鍋、
糸切り底（板
状圧痕のある
ものを含む）
の壺・皿、石
臼、炭化米、
鉄釘、鐵滓な
どが出土した。

本土壙は、
出土遺物から
16世紀末から17世紀前
半のもので、地下倉的
性格をもつといえよう。

SK-52

(Fig.11・14)

本土壙は調査区の西
側に位置し、SK-02に
切られ、SK-51を切っ
ている。径90cm前後の
平面形円形を呈し、40
cm前後の遺存で、床面
は皿状をなし、壁は緩
く立ち上がっている。

出土遺物：本土壙から

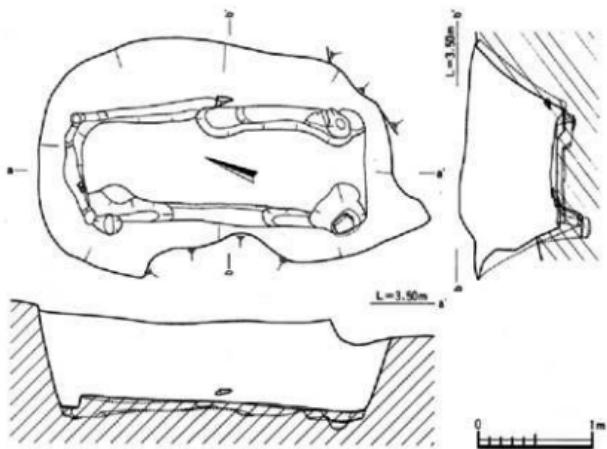


Fig.15 第51号土壙 (SK-51) 実測図および完掘状況



Fig.16 第51号土壤出土遺物

は少量の遺物が出土した。1は、糸切り底で板状圧痕がある土師器小皿で、口径7.4cm、器高1.35cm、底径5.8cmを測り、約5%遺存している。出土遺物のなかでは糸切り底の土師器壺・皿が多く

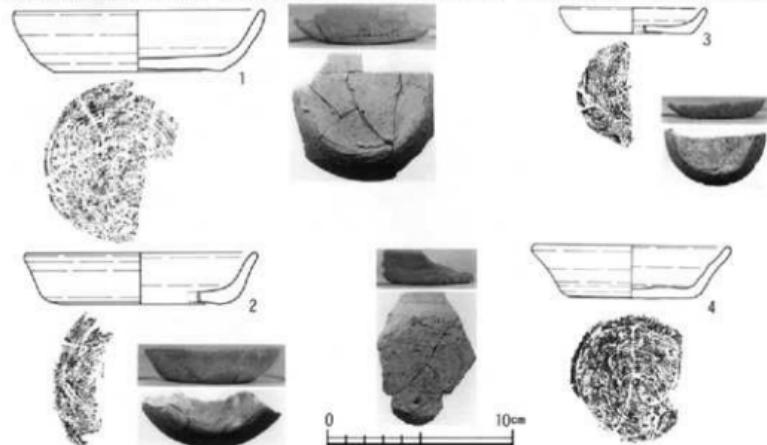


Fig.17 第77号井戸出土土器

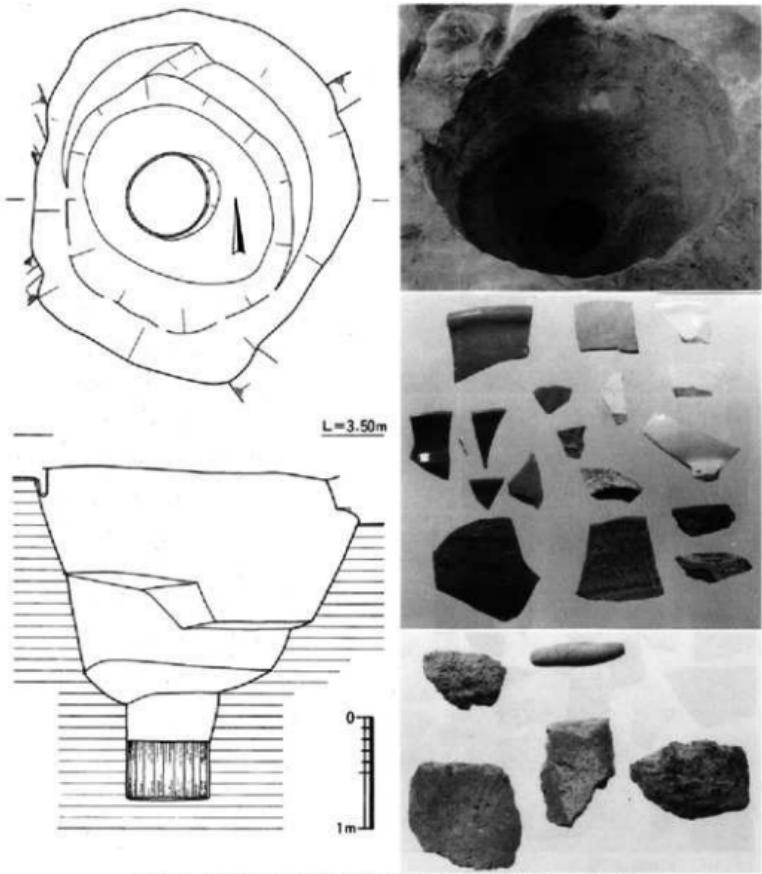


Fig.18 第77号井戸 (SE-77) 実測図および発掘状況・出土遺物
く、陶器が数点ある。出土遺物から、本土墳は17世紀前半か。

SE-77 (Fig.17~19)

本井戸は調査区のほぼ中央部に位置し、SA-78、SK-50や柱穴に切られている。径3m前後の円形を呈し、2.5m前後遺存する鉢形をなす掘り方をもっている。なお、掘り方の途中には階段上の棚がある。井筒は掘り方のほぼ中央部に位置し、径70cm強の円形を呈し、底から50cmま

で幅10cm前後、厚さ20cm前後の杉の板材を用いた木枠を巡らしている。底の標高は25cmである。
出土遺物：本井戸からは比較的まとまった遺物が出土した。1～4は糸切り底の土師器で3が
小皿、他は环である。1・2・4は口径13.2cm、12.4cm、10.5cm、器高3.3cm、2.75cm、2.8cm、底
径9cm、9.7cm、6.8cm。3は口径7.8cm、器高1.4cm、底径6.8cm。出土遺物のなかでは、糸切り

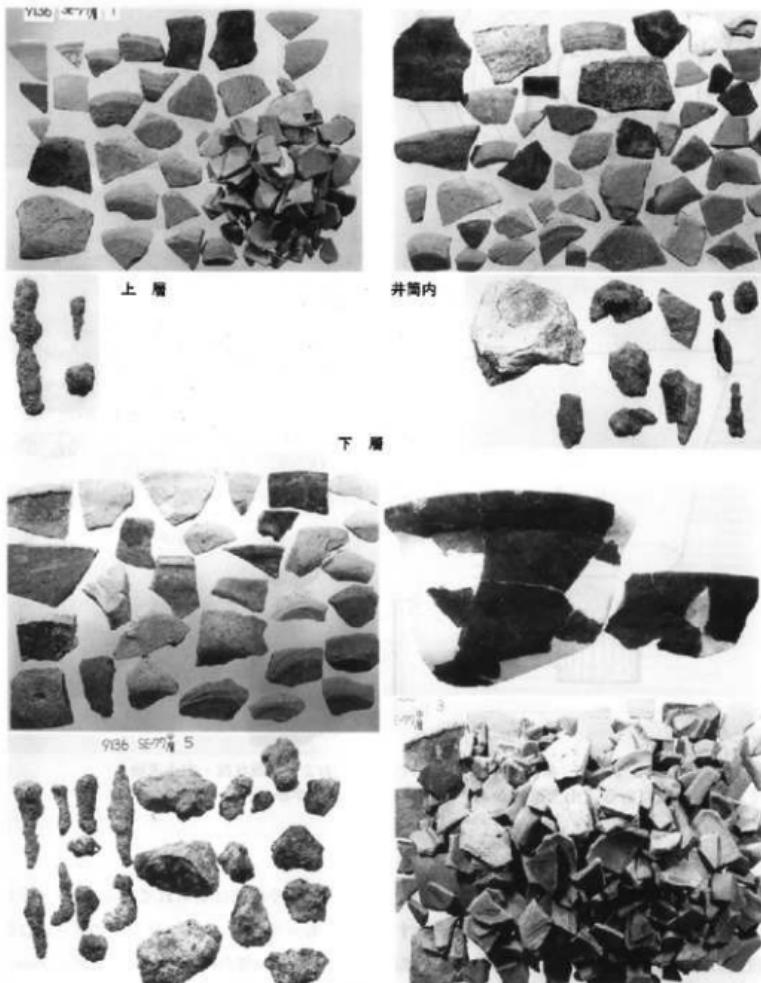


Fig.19 第77号井戸出土遺物

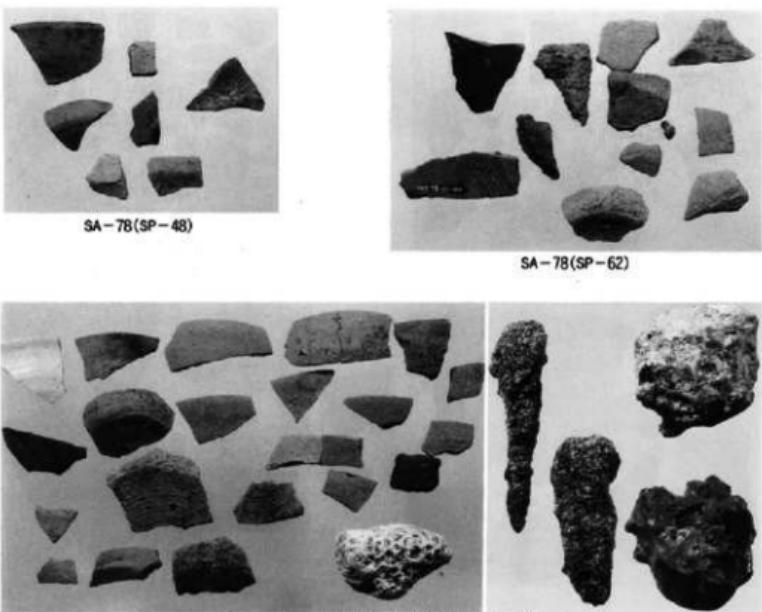


Fig.20 第78号標列および第60号溝出土遺物

底の土師器環・皿が上下層・井筒内とも多く、環の口径12cm前後のものが多い。以上のはか、検出面で染付の磁器があるほか、上層・井筒内・下層から少量の青磁・白磁の碗の細片が出土した。下層では口径40cmの土鍋や釘などの鐵器、鐵錠が出土した。

以上の出土遺物から、本井戸は16世紀のもので、16世紀末には廃棄されたといえよう。

SD-60 (Fig.20・23)

本溝は調査区の南西部に位置し、SE-01に切られている。幅60cm前後で15cm前後遺存し、断面形がU字状をなしている。

本溝からは、北宋錢に（治平元寶）1点と少量の糸切り底の土師器環と白磁片1点が出土した。17世紀初頭前後のものか。

SA-78 (Fig.20)

調査区の中央部を南北に横切る形で検出した。SP-48・61・62・73・80からなり、SE-01、SB-79に切られている。柱穴中心間は1.6mで4間分検出した。径50cm前後の円形の掘り方をも

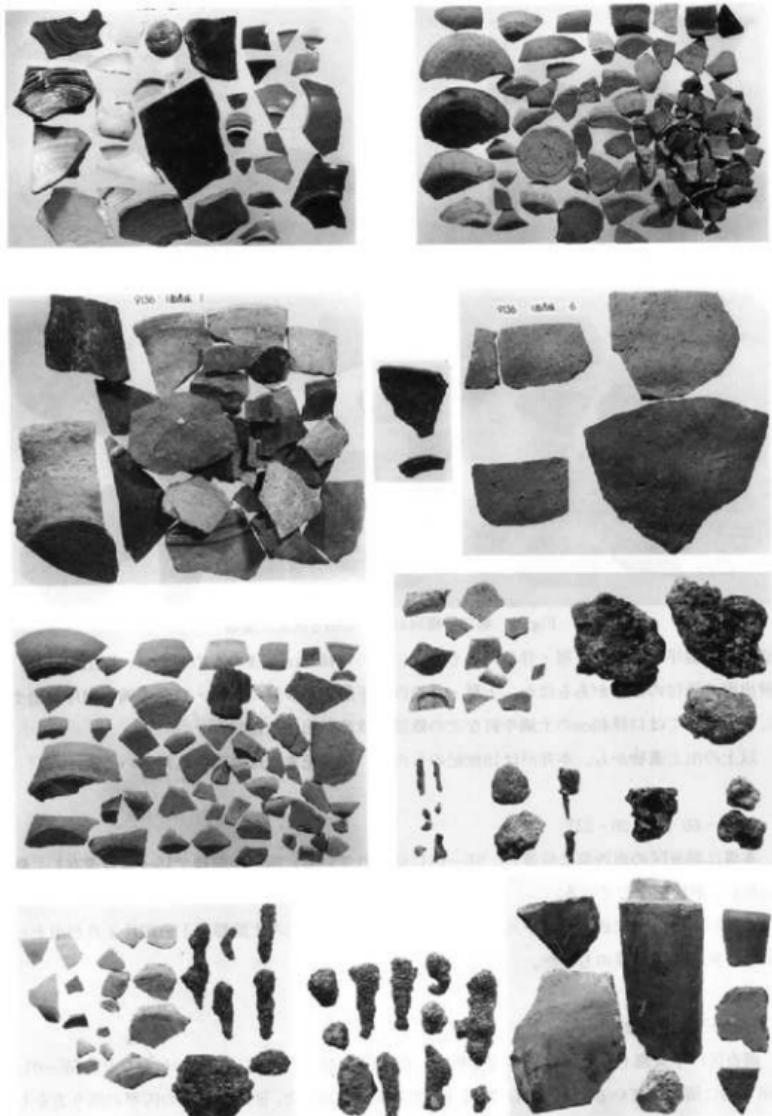


Fig.21 遺構検出時出土遺物

ち、柱痕跡は確認できなかったが、標高3.05m前後に板状の石を礎石状に敷いている。掘立柱建物の可能性もある。N-24°-Wの方位をもっている。

出土遺物としては、SP-48・62から少量出土している。糸切り底の土師器、擂鉢片がある。切り合い関係と出土土師器から、16世紀末から17世紀初頭のものか。

SB-79

調査区の北側で、4間分検出し、SK-09、SP-49に切られ、SK-50、SA-78を切っている。柱穴中心間は2.3mで、20~30cm前後遺存しているが柱痕跡は検出できなかった。本建物はN-60°-Eの方位をもっている。本建物の柱穴からは、数点の糸切り底の土師器細片が出土した

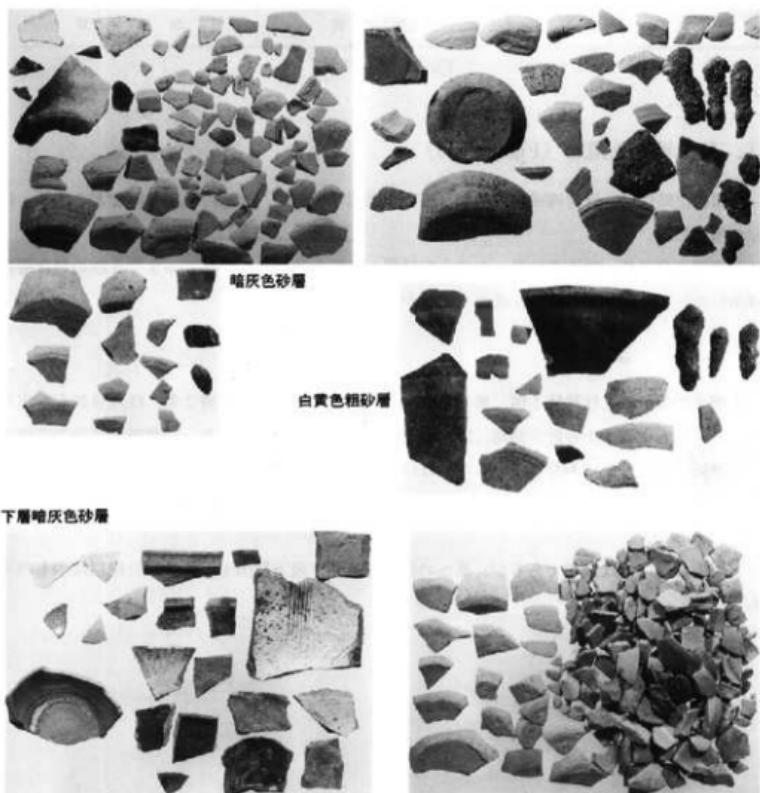


Fig.22 下層包含層出土遺物

SD-60	SP-027
治平元寶	開元通寶
SP-025	暗灰色砂層
大鏡通寶	至元通寶
	政和通寶

Fig.23 出土銅錢

のみである。

3. 包含層出土遺物 (Fig.21~23)

遺構検出時には、近世陶磁器、糸切り底の土師器壊・皿類、青磁、瓦類、釘などの鉄器、鐵滓が出土した。

遺構調査終了後、暗灰色砂層・白黄色粗砂層・暗灰色砂層と、標高50cmまで3枚の包含層を検出した。各包含層とも糸切り底の土師器が大半を占めている。

III まとめ

本調査では、掘立柱建物1棟、櫛列1条、井戸2基、土壙7基、溝2条、柱穴多数を検出した。いずれも中世末から近世初期(16C末~17C前半)の遺構群である。本調査地は神谷宗湛の居住地推定地の一画にあたっているが、ほぼ同時期の遺構はあるものの、決定づける遺構・遺物は検出できなかった。遺構のなかでは、板枠を用いたSK-50・51は特異であり、類例を待ちたい。

下層包含層はほぼ水平であるが、東への傾斜をもち、最下層出土遺物は14世紀以降のものである。

付録：佐賀銀行工事立会出土遺物

1. 工事立会に至る経緯

今回の工事立会は平成2年11月6日、博多区網町5-11地内の株式会社佐賀銀行の店舗建替にともない、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査願いが提出された事により始まる。受付番号は2-2-301である。

これを受け埋蔵文化財課では遺跡包蔵地内（博多遺跡群）である事を確認、同年11月29日に試掘調査を行った。試掘溝は遺跡の立地する砂丘と直交方向に3ヶ所設定した。

土層は標高約3.5mのGLより57-100cmまでが近・現代の造成土、110-170cmまでが近世包含層、190-240cmまでが中世末～近世初頭の整地層で以下、第2試掘溝中程から第3試掘溝にかけ干涸の泥炭が堆積し、地表下215-310cmで基盤の黄灰砂層に達する事を確認した（Fig.26）。遺構は第1・第2試掘溝で柱穴を各1本、第3試掘溝の整地層下面で杭を3本確認した。

同課は申請者と協議を重ね、結果、砂丘の落ち際で遺構が少く從前の構造物による搅乱が多い事、また申請者側が機械室等地下の構造物を南に移動し砂丘側の基礎の根切底をGLより2m以内におさめる様設計変更を行う事となり、再度設計図の提出を受けこれを確認、基礎の根切り工事時に同課の職員が立ち会う事とした。

工事立会は重機の根切り作業に合わせて平成3年4月17日～25日の4日間を行い、同課の横山邦雄・加藤良彦が担当した。



Fig.24 調査区位図 (1/4000)

2. 位置と概要

申請地は博多区綱場町5-11地内に所在する。博多遺跡群は北の「息の浜」南の「博多浜」の博多湾岸に沿った二つの砂丘列上に立地しており、申請地はこの砂丘間に西から入る入江に面した「息の浜」砂丘の南落ち際に位置する。

申請地は砂丘上と入江の干潟上とにまたがっており、立会は砂丘側の基礎工事の根切作業がGLから2m以内である事の確認と遺構に達した場合の工事の中止と遺構掘削・略測、干潟部の杭の略測と遺物の収集を目的として行った。

立会中、入江の落ち際に推定より南側に検出され、地下室部分の工事が遺構面に達する範囲が10m²程有り、土壙を2基確認した。このうち径1.2m程の円形の上塙内から16世紀代の中国製の白磁皿13枚

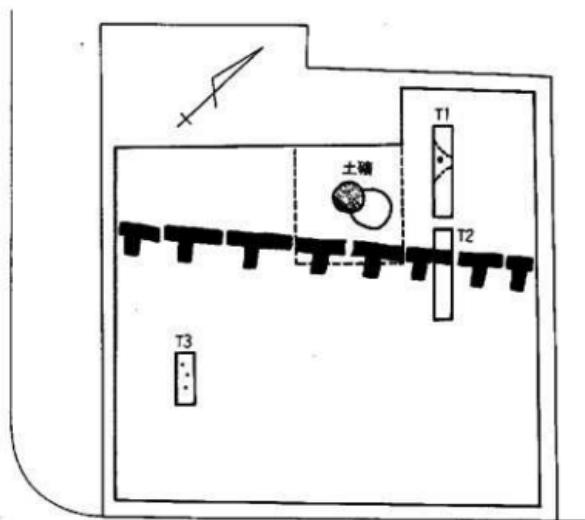


Fig.25 遺構概念図 (1/350)

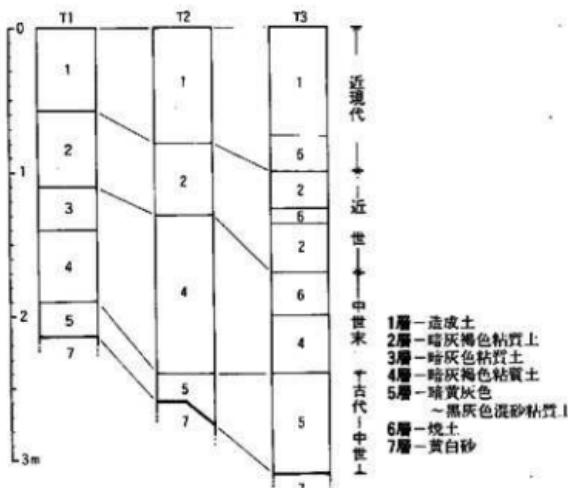


Fig.26 土層柱状図



Fig.27 立会風景

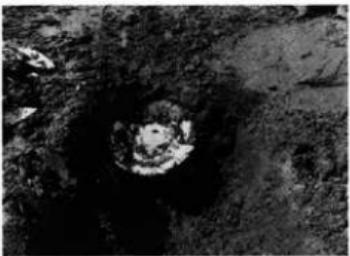


Fig.28 土壌内白磁出土状況

と青花碗4点、青磁盤等、ことに白磁皿は13枚が重なった状態で検出された(Fig.28)。他は破片で廃棄された状態である。入江沿岸の第60・61次調査では割石詰めの該期の倉庫基壇と考えられる遺構が検出されて倉地が想定されており、今回の資料も此等に関連すると思われる。

出土した遺物は博多遺跡群内でも数少い16世紀代の白磁・青磁・青花の良好な一括資料であり、専修大学教授亀井明徳氏の熱心な奨めもあり、今回紹介する事となった。遺物実測団は亀井教授の指導のもと堀井京美の手を煩わせた。記して感謝する次第である。

3. 出土遺物 (Fig.29~31)

1~19は白磁である。1~13は腰折れ口縁部外反の皿で全て重なって検出された。器形・調整等全て同一で、同一の窯で量産された一括品である。器壁は薄く体部中位で1~2.5mm。高台も薄く内傾気味に立つ。釉は乳白色の透明釉で水裂はない。全面に施釉され疊付と内側中位までをカキ取っている。胎土は白色で精良。外面体部中位~高台脇の全周と高台内際の輪状、見込中央の径4~6cm程の範間に灰白~灰黒色の瘤津の付着が全てに見受けられる。口径16.0~16.2cmのもの(2・3・4・5・10)と16.4~16.6cmの若干大き目のもの(1・6・7・8・9・11・12・13)とがあるが器高は2.9~3.5cmと口径の大小に別なくばらつきがあり、同一規格の範囲と理解して大過ないと思われる。14も同じ口縁外反の基筒底の小形の皿で口径12.4・器高2.4cm。全面施釉で疊付と内側の釉をカキ取る。高台内際に砂が熔着する。15は端反りの皿で口径15cm。16は無高台の皿で口縁が若干外反する。口径16.5cmで外底端部を高台状に若干削り出す。見込みに不鮮明ながら唐草文を線刻し中に黒灰色のシミがある。淡黄褐色の釉を全面に施し口縁部を口禿げとする。17・18は小形の口縁が内彎する皿で口径11.5・器高3.5cm。器壁は厚く釉は黄白色の不透明釉で細かな貫入が入る。内面と体部中位までかけられる。胎土は白色で軟質。高台内に墨書がある。18は同種の底部である。19は白磁碗で口径16cm。体部がゆるく内彎し深い器形となる。外面口縁下に数条の凹線気味のヘラケズリがある。釉・胎土は17・18と同様。20~24は龍泉窯系青磁。20は碗で底径7.1cm。釉は暗緑灰色で高台内以外に厚く施釉す

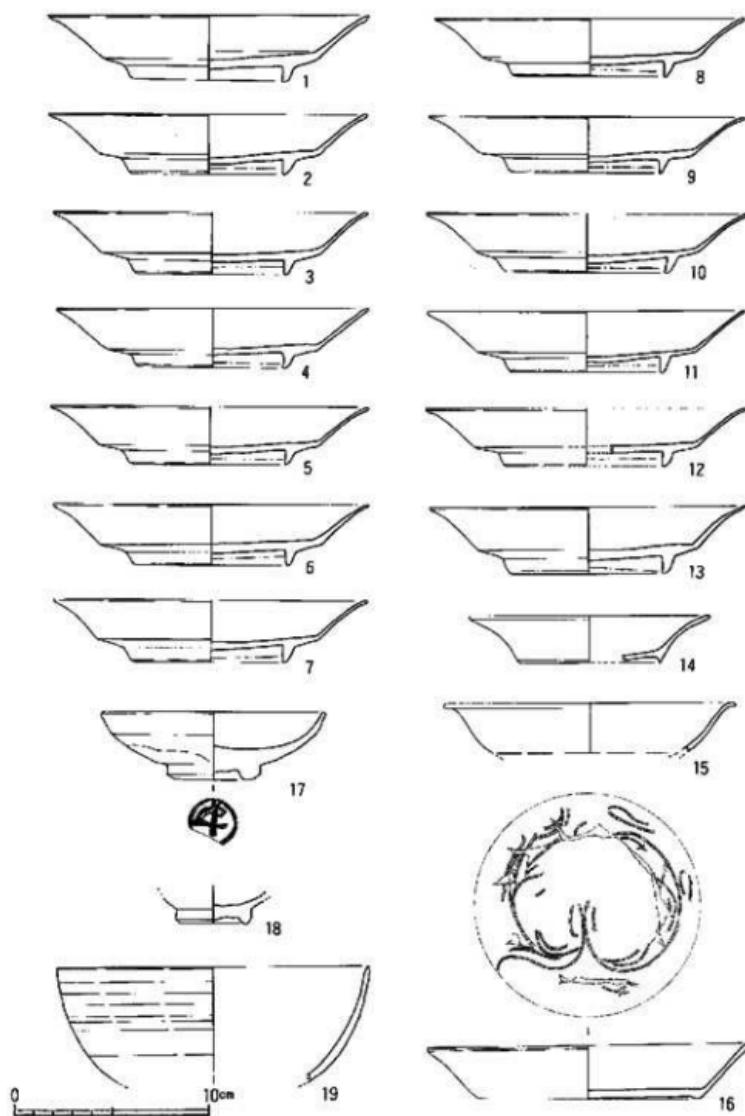


Fig.29 土壌出土遺物(1) (1/3)

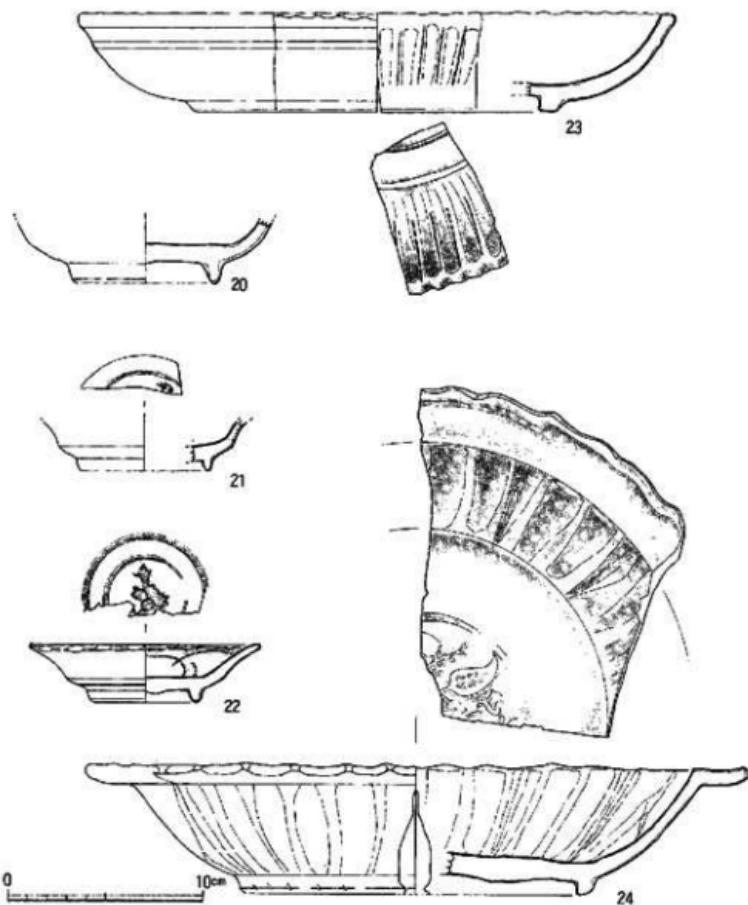


Fig.30 土壌出土遺物(2) (1/3)

る。21は腰折れの环で见込みに圆线と印花文が有る。22は高台付稜花皿で口径11.9器高3cm。见込みに印花文を施す。23・24は盤で、23は復原口径31・器高5.1cmを測る。見込みに圆线2条と突带を1条めぐらし凹線の細かな蓮弁を刻む。口唇は丸く收め細かな稜花となる。釉は全面施釉。24は溝縁で細かな稜花となり口径34cmを測る。内外の体部に幅広の凹線による蓮弁文を施し、見込みに草花文を印刻する。高台内側の釉を輪状にカキ取る。25~31は青花で25~29は假

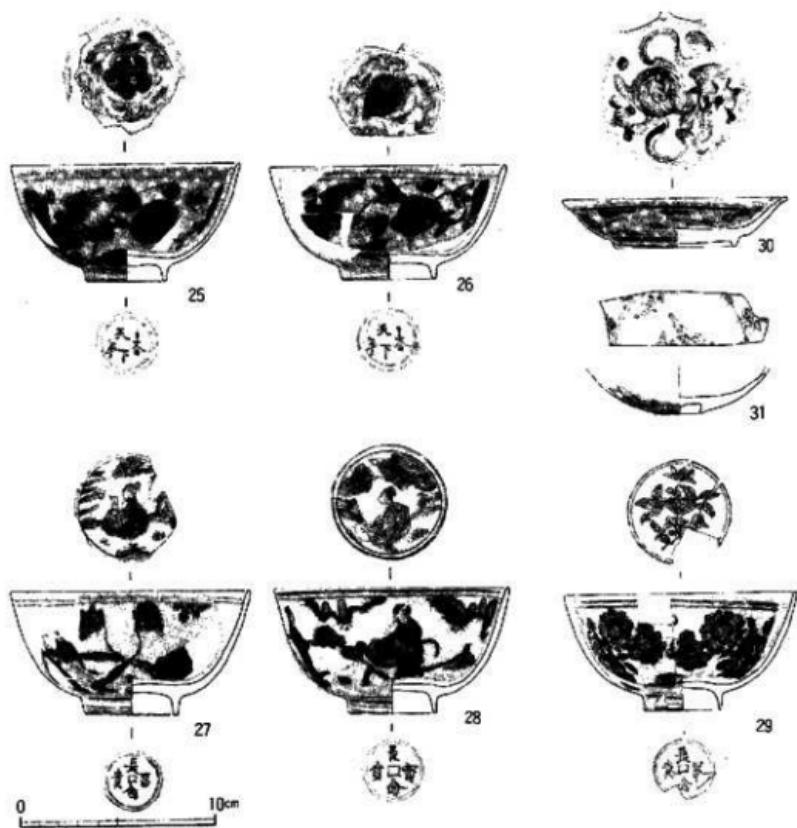


Fig.31 土壤出土遺物(3) (1/3)

頭心型の碗。25・26と27~29と作風で2つに分けられる。25・26は体部外面と見込に藍色の兜須で大きくにじんだ牡丹唐草文を描き高台内に「天下太平」の字款を書く。27・28は体部外面と見込みに山水人物像29は鉢植え牡丹文と花卉文を鮮明な暗蓝色の兜須で描き高台内に「長命富貴」の字款を書く。口径11.8~12.3・器高5.9~6.4cmを測る。30は端反りの高台付皿で見込みに玉取獅子・外面に牡丹唐草文を描く。31は葵筋底の皿で外面に芭蕉葉文・見込にねじ花を描く。

博多 39

—博多遺跡群第75次調査報告—

1993年（平成5年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 齋印刷株式会社
福岡市西区小戸四丁目5番42号